

「精霊よびだしうでわ」

村越知晟

今回おすすめの一話として紹介するのは、てんとう虫コミックス 21 巻に掲載されている「精霊よびだしうでわ」です。この話は、冬から春への季節の変わり目について思い出し、優しさや切なさが入り混じった話です。

この話は、ドラえもんが「精霊よびだしうでわ」というひみつ道具を出すことから始まります。この道具は、「〇〇の精」というとその精霊が現れ、呼び出した人の命令通りに動かすことができます。しかし、精霊にも自我があるため自分勝手な行動をとることもあり、周囲から精霊のもととなる現象がなくなると精霊は消滅します。この道具を装着したのび太が寒いのは「雪のせい」だと言ったところ、「雪の精」が召喚されました。雪の精は、のび太にちょっかいをかけたジャイアンやスネ夫、忠告をしに来たドラえもんを追い払い、のび太と思う存分遊びます。その結果、のび太は高熱を出してしまい、大雪のため医者も来られない事態になってしまいました。このことを悔いた雪の精は、のび太の額に自らの手を当て、熱を下げようとします。のび太は、雪の精が消えてしまうと行ったものの、雪の精は手を当て続け朝になると精霊は消滅し、熱は下がっていました。

この話は、最初に言った通り優しさと切なさが入り混じった話だと思います。雪の精は自分のわがままのせいでのび太が風邪をひいたことを後悔し、自らを犠牲にしてまでのび太の熱を下げようとします。その行動を夜中にのび太が寝た後、そっとうっていることから雪の精の優しさのようなものを感じ取れます。一方、のび太も雪の精の謝罪を受け入れ雪の精と遊べたことを楽しかったと言います。この2人の優しさは、恩着せがましいものではない素朴な優しさのように感じました。こうした純粋な優しさはこの作品の魅力の1つであると思います。また、精霊は自らが消える運命であることを受け入れ自らを犠牲にする行動をとっています。近くに発生源となる現象がなくなると消えるということは、雪がとければ精霊は消えてしまいます。このシーンは雪という自然現象がもつ無常な宿命を感じさせます。雪がとけるという一見、何気ない現象に感じられる切なさもこの作品の魅力の1つといえるでしょう。

この作品は、最後のコマで雪がとけもうすぐ春が来ると喜ぶドラえもんや寂しげな顔をしたのび太の対比が特に印象的です。普通、春が来るということに対し、厳しい寒さの終わり、新しい年度の始まりなどポジティブなイメージを感じる人が多いと思います。しかし、それは同時に雪がとけ冬が終わったという1つの終わりでもあります。この盲点になりがちな終わりに伴う切なさのようなものを描いている話なのかもしれません。この話を読むと、春の始まりが少し寂しげに感じられるかもしれません。始まりがあれば、終わりがある。そんな当たり前なことに気付かせてくれるお話です。